

## 「甲子園はお祭り？」

コロナ禍での甲子園の高校野球は、様々なドラマを見せてくれた。あまり野球に興味のない私でも、超高校級におけるハイレベルのプレイに感動し、はつらつとしたパフォーマンスに開催の意味を感じている。

しかし、あの大阪桐蔭高と東海菅生高の土砂降りの中の1回戦については今も理解できない。雨天コールドは確かにルールにある。しかし、高校野球が教育の一環と言うなら、主催者側の配慮があつてしかるべきと思う。あの橋元徹でさえ「教育上最悪！」と激怒していたくらいで、多くの同感の意見があつたと思う。

ところで今から30年以上も前になるが、地方大会でホームランを打った選手がガッツポーズをしてダイヤモンドを一周したために、彼のホームランが取り消し寸前になる騒ぎがあつた。「高校野球は教育の一環だから、打たれた投手の心情にも配慮すべき」というのが高野連の説明であつた。教育の論理のどこに歓喜の表現を否定する根拠があると言うのだろうか。

今年の地方大会に参加した高校は全国3603校、予選試合数は全国で3554試合、その試合で一度も負けなかった高校49校が甲子園の全国大会の切符をつかんだ。そして、甲子園で開催された48試合で勝ち続けた智弁和歌山が優勝した。つまり、予選から無敗の高校1校こそが深紅の優勝旗を手に入れるのである。1試合ごとに1校が消えていくという、トーナメント方式所以の刹那である。

ゆえに、勝利至上主義は根強く生き残り、監督や指導者への服従は、甲子園への道という大義名分のもとに正当化される問題が続いている。打者が1球ごとに監督のサインを見ている。サインを出すのは選手自身でもいいし、選手の合意でスクイズを決められないのだろうか？ また選手はみんな丸坊主である。長髪の選手が現れたら、誰もがその選手を否定するのだろうか？

ふと小学校教師時代の運動会を思い出した。日曜日に開催されていた運動会が、体育授業の一環であるという理由で、40年前に全国で平日開催の波が押し寄せた。たこ焼き屋の出店があり、おばあさんが作った鯖寿司を家族で食べる観戦も姿を消した。

運動会は地元地域のお祭り、甲子園は高校野球児のお祭り、これでいいと思うのだが、この考えには教育的理念は無いと言われるのだろうか。

(丹羽 豊)